

論文

非実体化療法

林 信 弘

第1章 非実体化療法

非実体性の意識に徹すること

ありきたりの前置きは省略して、いきなり単刀直入に「非実体化療法」と筆者が呼ぶところのものについて、その基本的特性を説明して行きたいと思う。

まず最初に、この非実体化療法も、療法と言うかぎり、一つの治療技術である。何の治療技術かという、欲望を正しくコントロールするための治療技術である。しかし治療技術といっても、もちろん何かある特殊な医療技術や薬物療法といったようなものでもなければ、またある特殊な心理療法や身体訓練法でもない。それゆえ当然、とりたてて特別の施設や機具も必要としない。まったくの無い無いづくし、それで療法なのかと言われても仕方がないほどの無い無いづくし、あるのはただ、いつでも、どこでも、誰でもが実践可能な、ごく単純な意識訓練法だけである。そして、それで十分なのである。

考えてみれば、あの手この手、さまざまな治療技術が次々と開発されてきたが、それで欲望のコントロールに成功してきたか。お世辞にも成功してきたとは言えないであろう。むしろ事態は逆で、治療技術が複雑で高度になればなるほど、また施設や機具が大がかりになればなるほど、かえってますます欲望は異常に屈折・歪曲し、コントロール不能に陥ってきた。もうそろそろこの辺で、複雑化・高度化の方向から反転し、むしろ単純化・簡素化の方向に向かうべ

きではなからうか。俗に「シンプル・イズ・ベスト」(単純が最善)と言うではないか。

非実体化療法の根底にあるのは、非実体性の意識である。感覚的なものも、想像的なものも、理性的なものも、霊的なものも、意志的なものも、所有欲も、支配欲も、権力欲も、名誉欲も、虚栄心も、嫉妬も、甘えも、自己も、世界も、神も、仏も、およそいかなるものにも実体がなく、すべては幻想だという意識である。この意識に徹すること、そのときはじめて、癒される。限りなく深い安らぎのなかで、真に癒されて在るのである。

ということは、これ以外の方法では真に癒されることがないということである。ないというのが言いすぎなら、ほとんどないという和らげた言い方をしてもよいが、しかし筆者としては、ないと断定的に言いたいところである。なぜなら自由連想法においても、夢分析においても、能動的想像においても、行動療法や催眠療法や遊戯療法や箱庭療法においても、あるいは観想念仏やマンダラ観、アーメンや口称念仏やお題目においても、その他何においても、明示的か黙示的かはともかくとして、結局つねにある何らかの実体にとらわれており、そのため得られるのはせいぜい、ただ見せかけの対症療法的癒しだけだからである。いや実際には、それすらあやしいものである。

それゆえ非実体性の意識に徹するべきである。ただ単純に徹するべきである。

だが思い返してみると、実は単純なことほど、かえってむつかしいのである。先に「単純が最

善」と言ったが、その裏には「単純が一番むづかしい」がつきまとうのである。

現にたとえば、「すべては幻想だ」と言っている人に、ではあなたは、ものがあるから時間があるのか、それとも時間があるからものがあるのか、どちらだと思ふかと問い返したときに、ものがあるから時間があると答えたなら、すべては幻想だという、その人の言説は所詮はただの口先だけのものにすぎないとみなしてよいし、ましてや時間は我々人間に固有のものであり、動物は時間をもたないとか、時間は我々人間の悔恨から生まれたなどというのは論外のことである。なぜなら、もし非実体性の意識に徹するならば、すべてのものは時間という乗物に乗る乗客だからである。いや、これはあまり適切な比喩ではない。むしろ端的にこう言うべきである。人間や動物のみならず、山川草木、およそ存在するすべてのものが時間の表現形態だと。

もう一つ、同じような例を挙げよう。ものは運動する。この世のものであれ、あの世のものであれ、その他何であれ、ものはすべて運動する。おそらくこれには、誰も異論はないであろう。しかしそれでは、この「ものの運動」に関して、ものがあるから運動があるのか、運動があるからものがあるのか、いったいどちらであろうか。もし非実体性の意識に徹するならば当然、後者になる。だがその場合であっても、もしこの運動が、たとえば「存在エネルギー」や「カオス的無」、あるいは「絶対無分節者」や「無境界」といったような、ある特定のイメージでとらえられた途端、たちまちこの運動自体がひそかに実体化されてしまい、不可避的に前者に転化してしまうことになる。それほどに、非実体性の意識に徹するのは容易なことではないのである。

しかしそれでもなおやはり、非実体性の意識に徹するべきである。ただ単純に徹するべきで

ある。非実体化療法はここから始まる、またここから始まらねばならないのである。

あるがままに受け入れること

いかなるものにも実体がない、そうはっきりと意識したとき、そのとき人は自ずから、あるがままに受け入れることができるようになる。そのものが価値的にプラスであろうと、マイナスであろうと、喜びをもたらすものでであろうと、苦痛をもたらすものでであろうと、その他何であろうと、そうしたことにかかわりなく、あるがままに受け入れることができるようになる。なぜそうなるのか。ものへのとらわれ、執着から解放されるからである。

だが思うに、人生は本当に、ままならぬものである。愛されたいのに愛されず、愛したいのに愛することができず、愛したくないのに愛さずにはいられなかったり、自分が思うほど誰も自分を評価しておらず、そのことで苛立っていても、どうしようもなかったり、いくら努力しても、報われないときは報われないし、大して努力もしていないのに、うまく行くときは不思議なぐらいうまく行ったりする。何の罪もない子が事故で大怪我をしたり、友人を助けようとして、わざとウソをついたのに、かえって友人のみならず、周りの者からさえ不信の眼でみられたり、人の不幸に深く同情しながらも、反面どこか心の片隅で、自分には関係ないという、冷やかな思いがちらっとかすめるのをどうすることもできなかったりする。こんな氏素性や容貌で生まれなくなかったし、こんな仕事など本当はしたくなかったりする。そもそも生まれたくて生まれたわけでもなく、死にたくないのに死んで行くのである。人生は本当に、ままならぬものである。思い通りの人生、何の矛盾も障害もない人生などありえない。もしあれば、もはやすでに生きながら死んでいるのだ。

だから大事なことは、このままならぬものを、

ままならぬままに、そのまま受け入れることである。目をそらしたり、逃げたり、抑圧したり、悪あがきせずに、すなおに受け入れることである。そして受け入れたうえで、欲望を正しくコントロールすること、つまり可能なかぎり利己的情念を浄化することにより、甘えもせず、うぬぼれもせず、卑屈にもならず、ましてや嫉妬したりすることもなく、心をまっすぐにして生きることである。いわば心の直立歩行、それが非実体化療法の課題なのである。

今日、自立という言葉がしばしば使われる。教育はもとよりのこと、心理相談、看護や福祉、あるいは宗教活動や政治活動その他、さまざまな対人援助活動の場面で使われる。たしかに自立は、従来にもまして、今後ますます重要なキーワードになって行くことは間違いないであろう。だがそれならば、自立とはいったいどういうことなのか。心の直立歩行、要するにそれが自立の核心である。

我々人間が身体（からだ）の直立歩行に成功して以来、すでに数百万年が経っているのに、心（こころ）の直立歩行にはいまだに成功していない。よたよたと、つねに何かに寄りかからずには歩いて行けず、うかうかすると這いつくばってしまう有様で、そのなかで互いに傷つけあい、苦しめあい続けているのである。

それゆえどうしても、心の直立歩行が求められる。一步一步着実に、まっすぐに立って歩いて行かねばならない。だがそのためには、まず何よりも、自然に対する関係、他者に対する関係、社会や国家に対する関係、神や仏に対する関係、その他いかなる関係であれ、それが苦渋をもたらすものであろうと、親和的なものであろうと、そうしたことにかかわりなく、あるがままに受け入れることである。それ以外に方法がないのである。

だがここにもまた、悪魔が忍び込む。あるがままに受け入れるという、そういう仕方を受け

入れる自分自身に対する甘えという悪魔がひそかに忍び込む。時として、当人自身も気づかないままに忍び込む。この悪魔は最も悪質で、これに取り憑かれるや、すべてが台無しになる。たとえば、自分はどうしようもない人間だと言う場合、そう言っている自分にひそかに酔い痴れ、甘ったれていることがしばしばある。だいたいそういうことを口に出して言うこと自体、おかしい。本当に心底、自分がどうしようもない人間だと思っていたら、口に出して言ったりしないであろう。それをわざわざ口に出して言うのは甘ったれている証拠である。そう指摘されても仕方がないであろう。あるがままに受け入れるということに潜む、この悪魔に取り憑かれることだけは絶対に避けなければならない。これに取り憑かれた途端すでに、あるがままに受け入れるということから大きくズレてしまい、それ以前の段階に後戻り、もはや心の直立歩行もなにもあったものではないからである。

自分自身に対する甘えという、この悪魔こそ、あるがままに受け入れることを妨げる最大の招かれざる客である。では、いったいどうすれば、これを追い払うことができるのか。答えは簡単、非実体性の意識に徹すること、ただ単純に徹することである。

利己的情念を浄化すること

経験的に言いうることは、人間というものは、その言動のいかなる面から見ても本質上、オモテ・ウラのある、まことに矛盾した逆説的存在者だということである。表向きは陽気で明るい人間なのに、実は裏では陰気で暗い人間だったり、逆に外見はいつも寡黙で物思いに沈んでいる感じを与えるが、しかし実際には何も大したことは考えておらず、かえって外見は大ざっぱで粗い印象の人間が実は内面では、いつもあれこれ思い悩んでいたりする。人前ではニコニコと社交的で、いつも笑いをさそう言動をとる人

間ほどかえって、私生活では陰があり、気むずかしく、周りの人を困らせており、逆に一見すると無愛想で取っ付きにくそうな人間が、話してみると意外と人なつっこく、素朴な人間だったりする。愛想の悪い人ほど単純で、愛想のよい人ほどかえって、腹の底で何を考えているかわからないところがある。理想主義者にかぎって、実際は打算的な実利主義者であり、打算的な実利主義者がかえって内心にロマンティックな夢を抱き続けていたりする。また、これは依存症や神経症に悩んでいる人によくあることだが、治りたいけれども、治ったあとの生活のことを考えると、治りたくないというふうに、治りたいが、治りたくなく、治りたくないが、やはり治りたいといったジレンマに置かれたりもするのである。あるいはまた、自分はダメな人間だと言っている人間が必ずしも本心からそう思っているわけではないし、それどころかそういう人間にかぎって、自分にひそかに酔い痴れ、甘んじられている場合すらあるし、反対に自信満々で態度のでかい人間が実はひそかな劣等感に悩まされていたりするのである。人間とはそういうものだと言ってしまうと、それまでのことだが、それにしてもつくづく人間とは矛盾にみちた逆説的存在者である。

とはいえ、こうした人間の逆説性をいくら詳細に並べ立ててみたところで、それ自体に大した意味はない。要は、いったいどうすればよいのかということである。

結論的に言えば、言動にオモテ・ウラがあること自体は、必ずしも悪いことではなく、悪いのはむしろ、オモテ・ウラのあるなしにかかわらず、言動が利己的になることであり、それゆえ大事なことは、できるかぎり我々の言動から、それに染みついた利己的情念を浄化すること、換言すれば、利己的情念を非実体化することにより、その力を無効にしつつ、その汚れを解消することである。

一般にオモテ・ウラのある言動は悪く評価され、逆にオモテ・ウラのない首尾一貫した言動は良い評価を受ける。あの人は影・日なたのない人だと言えば、まず間違いなくほめ言葉であろう。しかし考えてみれば、この評価は必ずしも妥当なものとは言いがたい。もちろん当人の前では、いい顔をしながら、陰でこそそとそとそその人の足を引っ張るような言動をとる人を誰も信用しないであろう。ウソつきは嫌われる。しかし実はこの場合においても、嫌われるのは、言動にオモテ・ウラがあるからではなく、オモテ・ウラのある言動のその全体が利己的だからである。裏返して言えば、たとえオモテ・ウラがあっても、もしその言動が人助けのためであれば、ほめられこそすれ、何ら非難される謂われはないであろう。俗に「ウソも方便」と言うではないか。

しかしそれにしても、オモテ・ウラがないというのは、いったい何を意味しているのか。オモテ色ということか。それともウラ色を意味しているのか。いや、決してそういうことではないだろう。そもそもオモテはウラあつてのオモテであり、ウラもまたオモテあつてのウラであり、両者はふたつでワンセットのものである。しかるにオモテ色というと、ウラがないということになるが、しかしウラがなければ、当然オモテもないことになり、オモテ色というのは形容矛盾で、成り立たないことになる。同じことがウラ色の場合にもあてはまる。それゆえオモテ・ウラがないというのは、文字通りオモテもウラもないことを意味している。別な言い方をすれば、幅も奥行も深みもなく、ただただ現われ出たところがすべてだということである。それはまことに分かりやすいといえは分かりやすいが、しかし平板きわまりなく、何の魅力もないであろう。

それに反して、何気ない一言の背後に感じられる豊かな人生経験、深い悲しみをたたえた優

しい微笑み、激しい怒りを貫く思いやりの心、その思いやりの心に隠されたひそかな罪責感等々、オモテとウラの織り成す微妙な交錯は我々の言動に幅と奥行と深みをもたらし、何とも言えない魅力を与える。だからオモテ・ウラのある言動の逆説性をただいたずらに否定したりせず、あるがままに受け入れるべきである。善し悪しにかかわりなく、まずあるがままに受け入れるべきである。もとよりオモテ・ウラのある言動はとかく利己的になりがちである。それは認めざるをえない。しかしそれでもなお、受け入れるべきである。そして受け入れたうえで、虚栄心や嫉妬やうぬぼれや甘え等々、オモテ・ウラのある言動に染みついた種々の利己的情念を可能なかぎり浄化するように努めねばならないのである。

この点については、オモテ・ウラのない言動、あるいはまたこう言ってよければ、比較的オモテ・ウラのズレの小さな言動にも妥当する。要するに、オモテ・ウラのあるなしにかかわらず、そのつどそのつどの言動をあるがままに受け入れつつ、可能なかぎりその言動に染みついた利己的情念を浄化すべきなのである。

とともに、オモテがウラを過剰に抑圧したり、逆にウラがオモテを呑み込んでしまったり、あるいはオモテとウラがあまりにも極端に乖離してしまったりすることがないようにしなければならない。オモテ・ウラのある言動が魅力的なのは、オモテがウラになり、ウラがオモテになり合いながら、あくまで両者が微妙に交錯しているかぎりにおいてだからである。あたかも、あのモーツァルトの音楽やレンブラントの絵画のように。

対人援助関係に入ること

しかしそれにしても、いったい何のために欲望をコントロールする必要があるのか。つまり同じことだが、いったい何のために自立する必

要があるのか。それは、利他的関係に入るため、今風に言えば、対人援助関係に入るためである。では、いったい何のために対人援助関係に入る必要があるのか。これについては、それによりはじめて、人は存在していること、生きて在ることに充実感を感じるからだと答えよう。いわゆる「ジコチュウ」（自己中心的）では、存在の充実、生の充実は得られないのである。

人が本当に生きていけると言えるのは、対人援助関係に入っているときである。もちろん人を助けることはむづかしい。本当に人を助けることなどできるのかと思いたくなるほどむづかしい。もしかしたら、人を本当に助けることなどできないのかもしれない。いや、できないと断定したほうがよいのかもしれない。しかしそれでもやはり、対人援助関係は人に存在の充実、生の充実を与えるのである。

たしかに対人援助関係は重荷を伴う。時には耐えがたいほどの重荷を伴う。こんな重荷を伴う対人援助関係から解放されれば、どれほど楽だろうと思う。ところが、いざ解放されてみると、当初はホッとするものの、そのあとに来るものは、何とも言えない虚脱感・空虚感である。解放されたら、あれもしよう、これもしよう、そうしたら、どんなに楽しいだろうと思っていたのに、いざ解放されてみると、何をやっても充実感がない。何でも好きなことができる、自分のための時間がたっぷりあるのに、何をやっても充実感がない。いったいこれは、どういうことであろうか。

人が充実感を感じるのは結局、人のために何かをしているときである。人のために働き、人のために努力しているときである。たとえ、それがどれほど重荷を伴うものであろうと、そこにしか本当の充実はないのである。ここにもまた、人間の逆説性がある。

しかし、「人のため」といっても、人の利己的情念を助長するようなことをしてはならな

い。人の利己的情念の助長、それは必ず自分にはね返ってきて、自分自身もまた利己的情念にとられることになる。その結果、対人援助関係は対人抑圧関係に転化してしまう。

この対人抑圧関係には、二種類ある。ひとつは、自他分離感に基づく抑圧関係であり、もうひとつは、自他合一感に基づく抑圧関係である。前者は、自他が「一のない二」となり、あまりにも離れすぎることから由来する抑圧関係であり、逆に後者は、自他が「二のない一」となり、あまりにも即きすぎ、過剰依存に陥ることから由来する抑圧関係である。

それゆえ対人援助関係の秘訣は、「即かず離れずの関係」に立つところにある。私は私でありながら人、人は人でありながら私というふうには、自他の区別は区別として、そのままにしてにおいて、しかもその間に自在に融通がつくところ、言い換えれば、「二であって一、一であって二」となって働くところにあるのである。

では、「即かず離れずの関係」に立つためには、どうすればよいのか。非実体性の意識に徹すること、ただ単純に徹することである。非実体化療は結局、ここから始まり、ここにかえって行かねばならないのである。

第2章 待つこと

サルトルの場合

フランスの著名な哲学者サルトルは、その著『実存主義とは何か』（伊吹武彦訳、人文書院刊）のなかで、およそ以下のような話を取り上げている。

フランスがナチの占領下に置かれていたある日のこと、サルトルがリセ（高等学校）の教師をしていたときに教えたことのある一人の若者が彼のもとを訪ねてきた。この若者は深刻な矛盾をかかえて、サルトルの助言を求めてやってきたのである。その矛盾とはおよそ次のような

ものであった。

この若者は、1940年の対独戦争で戦死した兄にかわって、ドゴール將軍の率いる自由フランス軍に身を投じるか、それとも母のもとにとどまり、母の生活を楽ませるか、決めかねていた。母のもとにとどまれば、母は喜ぶであろう。しかしそのことによって、ひたひたと迫り来るナチズムの暴力に目をつむることになり、フランス人民としての責任を見て見ぬふりをすることになる。だが反対に、参戦すれば、フランス人民のために貢献することになるかもしれないが、しかしそのために一人取り残された母は嘆き悲しみ、ひよっとしたら悲しみのあまり死んでしまうかもしれない。いったいどうすればよいのか。この若者のかかえていた矛盾とはだいたい以上のようなものであった。

ではサルトルはこの若者に対してどのような助言を与えたであろうか。ただ一言、「君は自由だ、選びなさい、つまり作り出しなさい」、ただそれだけであった。ここでサルトルが使った「作り出しなさい」の原語のフランス語は「inventez」で、その意味するところは、「いまだ存在しないものを新たに作り出せ」というものである。それゆえ当然サルトルは、「自分の行くべき道は自分で新たに作り出せ（切り開け）」という意味をこめて、この言葉を使っていると見てよいであろう。

サルトルから見れば、この若者がかかえた矛盾を解きうるいかなる普遍的な判断基準も存在しないように思われた。たとえばカント派の道徳に、「他人を決して手段として扱わず、目的として扱え」という定言命令がある。しかし残念ながら、これによっては若者の矛盾は決して解きえない。なぜなら、もし母を目的とすれば、戦う人々は手段となり、逆に戦う人々を目的とすれば、今度は母が手段となるからである。カント派の道徳は決して有効な判断基準たりえないのである。

では、キリスト教の「隣人愛」の教えならば、この矛盾を解きうるだろうか。だがそれにしても、いったいどちらが隣人なのか。母か、それとも戦う人々なのか。もし母を隣人とすれば、戦う人々は異邦人となり、戦う人々を隣人とすれば、母が異邦人となるであろう。キリスト教の隣人愛の教えでは、この矛盾を解くことはできない。そしてこの矛盾を解くことができない以上、若者の矛盾を解くこともできないのである。

それならば、「自分の正直な感情に従うのがよい。母を愛していると感じたら、とどまればよいし、そうでないと感じたら、参戦すればよい」とでも言えばよいのであろうか。たしかにこれが一番俗受けのする助言かもしれない。しかし感情というものは本来、不確実なものであり、決して行動の規定者たりえない。感情が行動を規定するのではなく、むしろ行動が感情を規定するのである。原因と結果を取り違えてはならない。母を愛しているから母のもとにとどまるのではなく、母のもとにとどまるから母を愛しているのである。だとすれば、この助言はまったく無効である。なぜなら母を愛しているという感情が確認されるためには、すでにこの矛盾が解かれ、母のもとにとどまるという行動が選ばとられてしまっているのだからである。

以上が、なぜ先のような助言を与えたかについてのサルトル自身の説明である。

このサルトルの問題提起はよく出来ていて、おかしいとは思いながらも、なかなかすっきりとは批判しにくいところがある。たとえば、もっと積極的に、こうしたほうがよいと助言すべきだと批判してみても、そのような助言はできない、かりに助言できたとしても、その助言を採用するかどうかは、あくまで彼自身の自由だと反論されれば、それまでのことである。

あるいはまた、サルトルは、感情が行動を規

定するのか、行動が感情を規定するのかという問題について、後者の立場に立っているが、これは承認しがたい。なぜなら、行動によって規定された感情は、すでにその行動を規定した感情の再認にすぎないからである。それゆえ、母のもとにとどまるから母を愛しているのだという、その母への愛は、すでに母のもとにとどまらせることへと促した母への愛の再認にすぎないのである。たしかに感情が行動を規定するとともに、逆に行動もまた感情を規定する。そこには相互循環があるが、しかしその相互循環の起点はあくまで感情なのである。と、そういった批判をしてみても、それはただ行動の矛盾を、アンビヴァレントな感情の矛盾に還元しただけのことであって、なんら根本的な批判になっていないのである。

あるいはさらに、こうも批判できよう。たしかに彼は思い悩んではいるが、しかし内心ではすでにひそかに、どちらにするか決めていたのではないか、ただあと一押し助言が欲しくて相談に来ているのではないか、それなら、そうすべきだとはっきり助言すべきだったのではないかと。だが、こうした批判も、たとえ内心ではすでに決めていたことがわかったとしても、それに賛成する、あるいは反対するような助言はすべきではない、決断はあくまで彼自身の自由において為されるべきである、と反論されれば、やはりそれまでのことである。

しかし思うに、人生はままたらぬものである。あれを取るか、これを取るか思い悩んだり、絶対にうまく行くと思って、予期せぬ手違いから、大失敗に陥ったり、よかれと思って言ったり、したことが悪く受け取られたり、てっきり味方だと信じていた人に陰で裏切られたり、いくら努力しても報われなかったり、いたるところでままたらぬ矛盾をかかえこむ。ひとつの矛盾を解いても、その解いたこと自体がまた新たな矛盾を招きよせてしまう。しかしそもそも

新たな矛盾を招きよせてしまうような解き方などというのは本当に解いたとは言えないであろう。だから新たな矛盾を招きよせてしまうのである。しかも、しばしば自分で招きよせたわけでもないのに、招きよせてしまうのである。人生とは、ままたらぬ矛盾の連鎖だと言っても過言ではないであろう。

だから、君は自由だ、と言われても、自由って何？、と反問したくなる。もし思いのままに状況を選択し、作り出すことを自由だとするならば、そのような自由がはたして我々に与えられているのかどうか、はなはだ疑わしい。かりに与えられているにしても、ごく限られたものでしかない。しかもその場合ですら、一見思いのままに選択し、作り出したように見えても、それは結果から見て、そう見えるだけのことであって、実際にはなにか見えないものが働いて、そのように選択し、作り出すようにさせたのかもしれないのである。

これは見方の分かれるところだが、もしこの種の自由が幻想だとすれば、いったいどうすればよいのであろうか。一言で言えば、待つことである。なにか見えないものが働き出して、自ずからそうしようという思いになるまで、つまりいわゆる「機が熟する」まで待つことである。とりわけサルトルがさきに取り上げたような、深刻な矛盾に直面し、人生の大きな分岐点に立たされたときには、特にそうである。

無理をしてはいけぬ。焦って選択しないことである。心静かに待つことである。機が熟すれば、自ずからに参戦するなり、母のもとにとどまるなり、ひとつの選択に達するであろう。もしかすれば、ある瞬間、矛盾から一気に解放され、まったく別の思いもよらない第三の選択に至るかもしれない。いずれにしろ、自ずからなる選択においては、その選択のもたらす結果に対しても、素直に責任を負うことができるだろう。しかもその際、いかなる選択をするに

しろ、その選択において、できるかぎり欲望をコントロールすることに努めることである。そのときはじめて我々は、真の自由（自立性）のなかで、存在すること、生きて在ることの充実感を感じることができるからである。

機が熟するまで待つこと、そしてひとたび機が熟して、ある選択に達すれば、その選択のなかで、可能なかぎり欲望のコントロールに努めること、もし私がサルトルならば、そのように助言したのであろう。

たしかに待つことはつらいことで、ただいたずらに時が流れて行くように感じられ、ついつい焦って中途半端に何かをしてしまい、その結果案の定、思ったようにはうまく行かず、そこで取り繕うために、また焦って何かをするが、これまたうまく行かない。こうした悪循環のなかで、かえっていたずらに時が流れて行くことになる。

待つことは、動に対する静で、たしかに受動的であるが、しかしこの受動性には、大きなエネルギーが要る。それなくしては、待つことはできない。しかも待つことは、エネルギーの充電である。決然たる選択を促す大きなエネルギーの充電なのである。

また欲望のコントロールは容易なことではない。そのほんのささやかなコントロールすら容易なことではない。しかしだからこそ、欲望のコントロールに努める必要がある。それにより、はじめて真に充実した生活が可能となるからである。

道元の場合

ところで、サルトルの場合と同じことが、たとえば道元の場合にもあてはまるであろう。有名な『正法眼蔵随聞記』のなかに、次のような話がある。あるとき一人の若者が、道元禅師の前に進み出て、次のように問うた。

「^{それがし}某甲老母現在せり。我れは即ち一子なり。

ひとへに某甲が扶持に依りて渡世す。恩愛もことに深し。孝順の志しも深し。是れに依ていさゝか世に随ひ人に随ふて、他の恩力を以て母の衣糧にあつ。我れ若し遁世籠居せば、母は一日の活命も存じ難し。是れに依て世間にありて一向佛道に入らざらんことも難事なり。若し猶も捨て、道に入るべき道理あらば、其の旨いかなるべきぞ。（私には老母が現在生きております。私はその一人息子であります。ひとえに私からの生活費によって暮しております。親子の恩愛もことに深く、私の孝順の志も深いものがあります。これによっていささか世間の事や人との関係に随って、そのお蔭をもって母の衣食の資を得ております。私がもし遁世して籠居するといいたしますと、母は一日も生活することが出来ません。しかしこれによって世間にとどまって一向に仏道に入れないことも困ったことであります。このような状態で世間を捨てて仏道に入るべき道理がありましたら、その旨はどのようなものでしょうかと。）」（『正法眼蔵随聞記』、古田紹欽訳註、角川文庫、155～157ページ）

これに対して道元は、「此こと難事なり。他人のはからひに非ず」と受けたうえで、参禅と親孝行が両立できれば、それがベストであるが（その好例として、母のもとを去って、五祖弘忍のもとに参禅するにあたって、銀子十両を得て、母の生活の資にあてたという、六祖慧能の逸話を引き合いに出している）、しかしそれがかなわぬ場合、どうすればよいのかという矛盾に対して、結局次のように答えている。

「母儀の一期を待て其の後障碍なく佛道に入らば、次第本意の如くにして神妙なり。しかあれども亦知らず、老少不定なれば、若し老母は久くとゞまりて我は先に去ること出来らん時に、支度相違せば、我れは佛道に入らざんことをくやみ、老母は是れを許さざる罪に沈て、兩人俱に益なふして互に罪を得ん時いかん。若し今生を捨て、佛道に入りたらば、老母は設ひ

餓死すとも、一子を放るして道に入らしめたる功德、豈に得道の良縁にあざんや。尤も曠劫多生にも捨て難き恩愛なれども、今生人身を受けて佛道にあへる時捨てたらば、眞實報恩者の道理なり。なんぞ佛意にかなはざらんや。一子出家すれば七世の父母得道すと見えたり。何ぞ一世の浮生の身を思ふて、永劫安樂の因を空く過さんやと云道理もあり。是らを能く自ら計らふべし。（母が亡くなるまで待って、その後母について心配する障りもなくなって仏道に入るならば、順序として本意なことであって神妙なことであるが、しかし老いたるものも、若いものも誰が先に死んで行くかはわからないことであり、もし老母が久しく命を長らえ、自分が先に死んで行くようなことが起った時には、支度していたことが相違することになり、自分は仏道に入らなかったことを後悔し、老母は息子の仏道に入るのを許さなかった罪に沈んで、二人とも益なくて互に罪を得ることになった時はどうしたらいいというのであるか。もしこの生涯を捨てて仏道に入ったならば、老母がたとい餓死しても、一人息子を許して仏道に入らせた功德があるのであり、その功德が一人息子の得道する良縁とならないことがどうしてあろうか。もっとも親子の恩愛というものは長い長い時間に互って幾度が生存を繰返してもなおその間に捨てることはむづかしいものであるけれども、今のこの生涯に人身をうけて仏教に遇ったのであるから、この時にこそ生涯を捨てたならば、仏教の教える恩愛を超えた本当の報恩者の行う道理となるのである。これがどうして仏意にかなわないことがあろうか。一人の子供が出家すれば七世に及んで父母が得道をすると言われていたのである。どうして一代のはかない命の身を思つて、長い時間に互る安樂の因を空しくやり過ぎてよからうかという道理も言われるのであり、これらの点をよくよく自分で考えなくてはならないことであると。）」（前掲書、156～159

ページ)。

道元にこれ以外に何が言えたであろうか。少年時代(十三歳)に出家し、仏教、とりわけ「坐禅仏教」(禅仏教)に人生のすべてを賭けてきた道元にとって、おそらくこう言うほかにはなかったであろう。

だがそれにしてもやはり、そのような助言をすべきではなかった。「出家」という、ある特定の道を明確に指示するような助言をすべきではなかった。

もとより道元は厳しい命令口調で出家せよと指示しているわけではない。もともと性格的に荒々しく粗野な言動を好まない道元は穏やかに諄々と説き聞かせている。それに道元はこの若者の矛盾を他人事として突き放して見るのではなく、自分の事として引き受け、ともにこの矛盾においてあろうとしている。そしてそのうえで若者に出家の道を指示している。この矛盾が非常に難しい問題で、他人があれこれ言えるものではなく、基本的には本人が自分でよくよく考えて解決するほかにはないことを十分に承知したうえで、なおそのうえで出家の道を指示するのである。

だがそうであっても、やはりそのような助言をすべきではなかった。「老母は是れを許さざる罪に沈て」とか、「一子出家すれば七世の父母得道す」といったような、やや押しつけがましい道理までもち出して、出家を促すような助言をすべきではなかった。それに、もともと道元は、身滅心常、身は滅んでも心は滅びないといった類の靈魂不滅説を外道の教えとして厳しく戒めていたはずである。当然、輪廻転生説も邪見とみなしていたはずである。それなのに、ここで道元は、そのような邪見まで引き合いに出して出家を促している。それは道元の教えに反することではないのか。自分の信じる道に他の人も入ってもらいたいという道元の思いはわかる。しかし自分自身の教えに反する道理まで

もち出して、出家を促すような助言をすべきではなかった。ただ静かに次のように助言すべきであった。機が熟するまで待つこと、自ずからにこうしようという思いになるまで待つこと、そうすれば結果が悪くとも、素直に受け入れることができるであろう、ただし、たとえどのような道を選択することになろうとも、可能な限り欲望のコントロールに努めることである、と。

第3章 自立すること

憑依と自立

「私が生きているのではない、母が私を生きているのだ」、「私が生きているのではない、妻が私を生きているのだ」、「私が生きているのではない、酒が、ギャンブルが私を生きているのだ」、「私が生きているのではない、学校が私を生きているのだ」、「私が生きているのではない、会社が私を生きているのだ」、「私が生きているのではない、国家が私を生きているのだ」、「私が生きているのではない、祖先の霊が私を生きているのだ」、「私が生きているのではない、神が、仏が私を生きているのだ」等々、数え上げれば切りがないが、要するに、自我の生き方のひとつとして、次のように定式化できる生き方があるということである。すなわち、私が生きているのではない、それが私を生きているのだ、と。

上記の例示は、この定式化中の「それ」に該当するものを、ただ思いつくままに若干、枚挙しただけのことであって、実際にはこの枚挙には切りがない。より具体的に枚挙すればするほど、切りがない。しかも、切りがないとともに、いくら枚挙しても、この枚挙自体に、大した意味はないのである。

もちろん、「それ」に該当するものをいくつかのパターンに分類することはできる。たとえ

ば、山や川や石や水や風や火といった自然的事物、犬や馬や牛や蛇や草や木といった動植物、老若男女を問わず個々の人間、貨幣や地位や身分や権力や名誉や国家や民族や人類といった集合的表象、自然や宇宙、霊的なものや無意識的なもの、超越的存在者としての神や仏といった具合に分類することはできる。しかしこうした分類に大した意味はない。その他、どのようなパターンで分類しようと、またどれほど詳細に、どれほど完璧に分類しようと、そのこと自体に大した意味はない。肝心なことは、「それ」に該当するものとして枚挙されるものが何であるかということではなくて、そうしたことにかかわりなく、先の定式化を貫く本質が何であるかということである。

これについては、まず第一に確認されることは、この定式化においては、「私」と「それ」とのあいだの自他二元的分離が溶解し、「それ」が「私」に取り憑くということである。では、この取り憑くということとは、どういうことか。これについては、概略、次のように要約できよう。

（１）「私」の保有するエネルギーが、「それ」のなかに吸い取られて行き、いわゆる「自我縮小」が進行する。

（２）代わって「それ」が、自らの保有するエネルギーを「私」のなかに注ぎ込む。つまり、「私」のなかに「それ」が侵入して来る。

（３）その結果、「私」は、「それ」に包摂され、呑み込まれ、「それ」の一部へと変容する。「私」は「それ」に奉仕する器官であり、「それ」を容れる器であり、「それ」によって思いのままに操られるものとなるのである。

以上が、「私」への「それ」の憑依現象の概要であるが、しかしこれに対しては、ちょうどその裏返しとして、「それ」への「私」の憑依現象が表裏一体・不可分のものとして、つねに働いており、これについてもまた、概略、次の

ように要約できよう。

（１）「それ」の保有するエネルギーが、「私」のなかに吸い取られて行き、いわゆる「自我肥大」が進行する。

（２）代わって「私」の保有するエネルギーを「それ」のなかに吹き込み、「私」を積極的に「それ」のなかに投入する。つまり、憑依の逆流・引き戻しが起こる。

（３）この逆流・引き戻しのなかで、「私」は、「それ」となって見、「それ」となって感じ、「それ」となって考え、「それ」となって働く。

（４）その結果、「それ」は、「私」に包摂され、呑み込まれ、「私」の一部へと変容する。「それ」は「私」に奉仕する器官であり、「私」を容れる器であり、「私」によって思いのままに操られるものとなるのである。

この二つの憑依現象は、すでに触れたように、同じ一つの現象の両面であって、決して切り離すことができない。一方があるところ、必ず他方がある。もちろん、ケース・バイ・ケースで、ある場合には、前者の憑依現象が優位を占め、ある場合には、後者の憑依現象が優位を占めることがあるが、それでもこの二つの憑依現象はつねに何らかの形で混在して存在している。ただし、事の順序から言えば、まず前者の憑依現象が先に起こり、それに引き続いて後者の憑依現象が生じるのであって、逆ではない。しかもその際、生じるといっても、ほとんど生じない場合から、前者の憑依現象を全面的に覆い隠してしまうまでに、大きく生じる場合まで、千差万別であり、一概にこうなるとは言えないが、とにかくこの二つの憑依現象は、オモテとなり、ウラとなりあいながら、分かちがたく混在していることだけは確かである。

たとえば、「私が生きているのではない、母が私を生きているのだ」という前者の憑依現象はつねに、何らかの形で、「母が生きているのではない、私が生きているのだ」という後

者の憑依現象をはらんでおり、同じように、「私が生きているのではない、祖先の霊が私を生きているのだ」という前者の憑依現象は、「祖先の霊が生きているのではない、私が祖先の霊を生きているのだ」という後者の憑依現象をはらんでいるのである。

そこで、今これに一般的な定式化を与えるとすれば、次のようになろう。すなわち、私が生きているのではない、それが私を生きているのだという憑依現象は、それが生きているのではない、私がそれを生きているのだという憑依現象をはらんでいる、と。この二つの憑依現象は表裏一体の関係にあるのである。そして、この関係の極限にあるのは、「神の子」・「神のしもべ」としての「私」と、「私は存在するものアルファであり、オメガだ」とする「私の神化」との表裏一体関係なのである。

こうした憑依現象に関して、これまでさまざまなパターン分析が行なわれてきた。たとえば、「仮面（ペルソナ）」から、もうひとつのパーソンとしての「影（シャドウ）」へ、「影」から「アニマ・アニムス」へ、次いで超人間的人格としての「マナ人格」へ、さらには「自己（セルフ）」へ、といったユングの「個性化過程」や、あるいは「判断的一般者」から「自覚的一般者」へ、さらには「叡智的一般者」へ、といった西田幾多郎の「述語的包摂関係」や、あるいはまた、「ケンタウロス／実存のレベル」から「超個的自己の帯域」へ、次いで「統一意識」へ、といったケン・ウィルバーの「脱同一化」などは、その好箇の例と言ってよいであろう。

しかしはっきり言ってしまうえば、こうしたパターン分析には、あまり意味がない。整理には便利だが、ただそれだけのことにすぎない。問題は、憑依現象をどうパターン分析するかではなく、それとどうつきあうかである。

一般に憑依現象には、マイナス評価がつきまとう。原始的とか、反人間的とか、病的とか、

狂的とか、といったマイナス評価がつきまとう。いったい、どうしてなのか。

結局それは、憑依現象が、「私」の自立性を抑圧するからである。たしかに憑依現象においては、「私」と「それ」のあいだの自他二元的分離が溶解し、「私」は、「私」を苦しめてきた孤独感から解放され、代わって深い自他合一感に満たされる。しかしその代償として、不可避免的に「私」の自立性が抑圧される。一方では、過度の自我縮小から来る過剰依存により、他方ではその裏返しとしての、過度の自我肥大から来る利己主義により、「私」の自立性が抑圧されるのである。しかもそれでいて、実を言えば、孤独感からもまた決して解放されてはいない。解放されたかのような錯覚にはまっているだけのことであって、本当のところは解放されてはならず、深いところで、厳然として存在し、ひそかに「私」を苦しめ続ける。だからこそ、この憑依現象においてある「私」は、この憑依現象の埒外にある「それ」に対しては、不安・恐怖・敵意・冷淡・無関心等々、マイナスの情念にとらわれるのである。

しかもさらにそのうえ、この憑依現象の行き着くはてに待ち受けているものは、分裂症的な自我崩壊である。これについては、たとえば、しばしば取り上げられる分裂症的三段論法を挙げておこう。すなわち、聖母マリアは処女である、ところで私は処女である、ゆえに私は聖母マリアである、と。ここでは、分裂症的な自我崩壊のなかで、聖母マリアが彼女に取り憑き、彼女が聖母マリアに取り憑いているのである。

もちろん、ここまで行くことはめったにない。自我の自立性はたしかに簡単に抑圧されはするものの、しかしそれでも、だからといって、自立性が壊れるところまで行くことはめったにない。どれほど抑圧されても、なおかろうじて自立性は守られるものである。先の例においても、もし他面で、彼女の自立性が確保されているな

らば、分裂症的な自我崩壊は起こらない。ところが、まれに自立性が完全に壊れ、分裂症的な自我崩壊にいたることがある。憑依現象は、まれとはいえ、つねにこの危険をはらんでいるのである。

それゆえ憑依現象には、十二分に注意を払わねばならない。特に自立性の希薄な人間の場合には、憑依現象にはまらないほうがよいだろう。なるほど憑依現象は時に、エクスタチックな一体感・安定感を与えてくれるが、その代償はあまりにも大きすぎるのである。

だが、もし自立性が十分に確保されているならば、どうであろうか。その場合でも、はまらないほうがよいのであろうか。これは非常にむづかしい問題であるが、原則的にはやはり、はまらないほうがよい。それが大原則である。その上で、あえて言えば、はまってもかまわない。いや、時には積極的にはまるのもよい。なぜなら憑依現象は時として、深い自他合一感のなかで、学問・芸術・宗教・教育・政治・経済その他、さまざまなレベルで、豊かな創造的エネルギーを活性化することがあるからである。

ただし、くどいようだが、それはあくまで、自立性が確保されているかぎりにおいてである。自立性が確保されているかぎりにおいて、時に憑依現象が豊かな創造的エネルギーの活性化につながることもあるのである。

それに、この憑依現象にはまって苦しんでいる人に援助の手をさしのべるためにも、はまった経験があるほうがよい。そのほうが適切な援助が可能となるだろう。

では、いったいどうすれば自立性が確保されるのか。非実体性の意識に徹すること、いかなる憑依現象にも実体がないということに徹することである。それによりはじめて、憑依現象にはまっていながらも、それに押しつぶされることなく、自立性が確保されるのである。

自立的依存

依存するな、とはよく言われることであるが、しかし実際問題として、依存しないわけには行かないし、また現に依存している。そもそも「人」という字は、人が人によりかかっている形から来ているということだが、まさに正鵠を射ている。それゆえ子は親に依存し、親は子に依存し、夫は妻に依存し、妻は夫に依存し、男は女に依存し、女は男に依存する。学校に依存し、会社に依存し、地域社会に依存し、階級社会に依存し、市場社会に依存し、国家に依存し、国際社会に依存する。それどころか、山川草木に依存し、神や仏に依存し、酒や薬物に依存する。それこそ何にでも依存する。いたるところ依存だけである。

しかも考えてみれば、依存それ自体が、必ずしも悪いわけではない。と言ったからといって、人に迷惑をかけたり、危害を加えたりしないかぎり、依存しようが、何をしようが、かまわないといったような、功利主義的な意味で、言っているわけではない。そうではなくて、もしこの依存が、自立を前提にした依存であるなら、あるいは自立を促す依存であるなら、あるいは自立を阻害しない依存であるなら、つまり要するに「自立的依存」であるなら、何ら非難される謂われはないということである。それゆえ、たとえば神や仏、酒や薬物に依存していても、それが自立的依存というあり方を失わないなら、非難される謂われはないのである。

とはいえ、とかく依存は自立なき依存に陥りがちである。他者依存の場合はもとよりのこと、神依存や仏依存、酒や薬物への依存、その他いかなる依存の場合でも、自立なき依存に陥りがちである。しかしこの自立なき依存は、満たされれば満たされたで、いくら満たされても切りがなく、あげくのはてに行き過ぎると、ついには自立性そのものが壊れ、幻聴や幻視、誇大妄想や恋愛妄想その他、種々の分裂症的自我崩壊

に陥りかねないのである。

もちろんそこまで行くことはめったにない。通常は何らかのかたちで、この自立なき依存は抑圧を受ける。しかし自立性が確保されないままに、依存自体が抑圧を受けると、今度は、アルコール依存症や薬物依存症、国家依存症や宗教依存症などに見られるごとく、強い暴力性を帯びた依存症に陥ったり、不安神経症や強迫神経症といった神経症、過食症や拒食症といった摂食障害、不登校や引きこもりその他、さまざまな心の病を引き起こし、最悪の場合には、自殺や殺人に至りかねないのである。

依存は十分に満たされなければならない。だが過剰依存は避けなければならない。自立的依存、それだけがこれを可能にする。では、いったいどうすれば、この自立的依存は可能なのか。非実体性の意識に徹すること、人であれ、物であれ、その他何であれ、人が依存するいかなるものにも実体がないという意識に徹すること、そのとき自ずから人は、依存しつつ自立し、自立しつつ依存するという、この困難な道を歩み始めるであろう。

心の民主化

人生に目的などありはしない。あるのはただ、この現在の快樂のみ。それだけが確かな生のあかしだ。もともと人生なんて、わけのわからないもので、真面目な努力家が何一つ報われることなく、惨めな生涯を終え、逆にずる賢い陰険家が何不自由ない生活を送り、長寿を完うしたりする。だから、己の本能、己の欲望に忠実であること。しみつたれた道徳のお説教や白々しい理想論など真っ平御免だ。それが、戦後日本の主流であった。

人間は助平で、年中、さかりのついた色情狂だ。それでいいではないか。あの手この手、手練手管を駆使して、性的快樂を追求すること、これに優る快樂があるうか。それも、戦後日本

の主流であった。

人間というものは、欲が深く、性悪で、信用できない。それゆえ人生の要諦は、このどうしようもない人間の本性を巧みに操作することで、金と権力を奪取し、維持し、拡張することにある。それもまた、戦後日本の主流であった。

そして、そのあげくのはてに待ち受けていたものは、深刻な人心の荒廃、さきの敗戦時よりも、なおいっそう深刻な荒廃であった。物質的安定なくして精神的安定はない、昔風に言えば、恒産なくして恒心なし、そう人々は信じこんできた。それは、戦後日本の一大スローガンだったが、しかし残念ながら、ものの見事に裏切られた。「恒心」どころか、今やそれこそ「荒心」であり、「衣食足って、礼節を知る」どころか、「衣食足って、礼節を知らず」である。日本史上、未曾有の豊かさを見たにもかかわらず、である。

だが、こう言ったからといって、別にお定まりの禁欲主義をすすめたいわけではない。そんなもので、人心の荒廃から回復できるなどと思ったら、大きな間違いだ。マキャヴェリクな快樂主義はしたたかで、最後の破滅にいたるまで、人心を貪り続けるであろう。それは、人心のガンである。

では、いったいどうすればよいのか。どうすれば、このガンを除去できるのか。非実体性の意識に裏づけられた欲望のコントロール、これ以外にないであろう。

欲望のコントロール、それが筆者の目下の基本テーマである。馬鹿くさいほど、生真面目なテーマである。人は絶対に欲望のコントロールなどできない。ほんのカケラほども、できっこない。欲望に狂いに狂い、飽きもせず互いに苦しめ、傷つけあいながら、人は死んで行くのだ。個としても、種や類としても、それが人の実相である。これまでもそうだったし、今もそうだ

し、これからもそうだ。そのあげくのはてに、人類は破滅する。

それでいいではないか、いや、それしかないではないか、そう開き直りたい気持ちがないわけではない。それどころか、もし人類の破滅に立会えたら、はい御苦労さんでした、と皮肉の一つも投げつけてやりたい気持ちすらある。とはいえ、それでは、あまりに芸がなさすぎる。やはり、ムダとはわかっていても、何とか可能なかぎり欲望をコントロールする術を学ぶ必要がある。

非実体性の意識に裏づけられた欲望のコントロール、目下のところ、これしかないと思っている。もちろん何らこれに拘泥するものではないが、しかしこれ以上に適当な方法が見つからない以上は、これしかないと思っている。

今日、人は非常に高度に発達したテクノサイエンスを手中にしている。このテクノサイエンスの本質は、コピーの拡大再生産にある。我々の生活のあらゆる分野において、オリジナリティを消去して、コピーと代替することにある。その動きは、とどまることを知らず、今や人間自身のコピー化としてのクローン人間の生産も間近である。

しかしこの無際限なコピーの拡大再生産は、我々の欲望の拡大再生産とピッタリ相応している。それゆえ、もしテクノサイエンスのもたらす弊害を克服しようとするならば、必ず欲望の正しいコントロールが必要である。それなくして、ただ技術的に制度を改革してみても、自家撞着で、おそらく確実に破綻するであろう。そして、その破綻の果てに待ち受けているものは……、それは誰にもわからない。ただそれが人類の破滅でないことを願うばかりである。

つねづね筆者は、制度の民主化に関して、たわいのない考えを抱いている。世襲制の廃止と選挙制・任期制の導入が、それである。世襲制は社会のガンである。それゆえ経済的世襲制は

もちろんのこと、政治的・行政的・社会的・文化的・宗教的分野等々、あらゆる分野における既得権の世襲が除去されねばならない。そしてそのためには、それと連動して、あらゆる分野において、部局長以上の上級管理職ポストに選挙制と任期制を導入する必要がある。任期制に関しては、一期の任期は最高5年までとする。ただし、5年には何の理論的根拠もないので、別にそれ以上でも、それ以下でもかまわないが、しかし10年、20年は長すぎる。しかもこの任期の断続的再任は認めても、連続的再任は認めない。さらに断続的再任に関しても、少なくとも三親等内の親族間での、たらいまわしの断続的再任は認めない。あるポストから別のポストへの横滑りも認めない。任期が切れれば、必ずいったん上級管理職ポストに就く以前の元のポストに戻ることにし、例外は認めない。といったような、たわいのない考えをあれこれ抱いている。

そんなことをしたら、社会は大混乱に陥るだろう。きっと人はそう言って、一蹴するにきまっている。しかし本当にそうだろうか。もし制度の民主化に心の民主化が伴うなら、もしかしたら実現可能なのではないか。そういう思いを抱き続けている。

では、心の民主化とはどういうことか。一言でいえば、平等意識の徹底である。では、平等意識とは、いったい何か。要するに問題はそれである。

平等意識とは、一人ひとりの人間をどこまでも尊重することにより、経済・政治・文化・教育・性・民族・人種といった種々のレベルにおける、欲望の抑圧的階層化を打破しようとする心の働きである。その際、一方では差異性を無視した平均主義、他方では業績主義（メリトクラシー）・弱肉強食の論理による行きすぎた競争万能主義を克服する必要がある。なぜなら、どちらも個人の自立性を抑圧・否定することに

なるからである。

平均主義は、いわゆる悪平等と呼ばれるもので、これは不可避免的に、欲望の抑圧的画一化を生む。ところが皮肉なことに、そのことがかえって、この欲望の抑圧的画一化の裏で、欲望の抑圧的階層化をはびこらせ、一部の人々による特権の世襲的独占を生み、こうして個人の自立性が急速に抑圧・否定されて行く。

逆に競争万能主義は、欲望の大びらな解放、欲望の自由放任を生む。そこでは、何でもありであり、ルールはあって、なきがごとし、弱者は踏みつけられ、強者はやりたい放題、正直者は馬鹿を見、ずる賢い連中がのさばり、その特権を世襲的に独占しようと画策する。こうして個人の自立性がこれまた急速に抑圧・否定されて行く。

平等意識は、個人の無差別的平等をすなおに受け入れる。いかなる人間にも、上下貴賤の差はない。人は、人として存在していること、それ自体において尊い。人の使用価値や交換価値よりも、存在価値が優先する。もちろん使用価値や交換価値もないがしろにはできない。それなくして事実上、人間関係は成り立たない。しかし、もしそれが持続的な支配・服従関係をもたらす方向で働く場合には、断固として拒否されねばならない。

しかしそれにしても、平等意識に徹するには、どうすればよいのか。非実体性の意識に徹することにより、人間の虚飾性を徹底して剥奪し、裸の人間にかえることである。古人の言葉を借りれば、「一無位の真人」にかえること、そこからやり直すほかないであろう。